

# シャンカラ派の聖典解釈と「出家遊行」

シャンカラ派の宗教伝統では、在俗の信者たちに対して、救いに与る方途としてカルマン（行為 *karman*）とバクティ（信愛 *bhakti*）のもつ救済論的な意義を説いてきた。また、俗世間を捨離した出家遊行者に対しては、「出家遊行」（サンニヤーサ *saṃnyāsa*）こそが解脱に到達するのに最も相応しい道であることを強調してきた。ここでは、シャンカラ派において、開祖として信じられるシャンカラの不二元論哲学をふまえて、いかに「出家遊行」という生き方の意義を説いてきたのかをめぐって考察してみたい。

## 「体験知」としてのヴェーダーンタ哲学

インド哲学史において、ヴェーダーンタ哲学がめざしたのは、仏教思想などと同じように、輪廻からの解脱であった。それは「哲学」とはいっても、存在の本質を論理的に探究しようとする西洋哲学とちがって、哲学的思惟そのものが宗教的実践を包含している。インドで一般的に「哲学」に対応するサンスクリット語には、「ダルシャナ」(*darśana*)の語が当てられる。この語は本来、「見る」を意味する動詞の語根√ *drś* から派生した名詞で、その意味は「見ること」、すなわち人間や存在世界の洞察および自覚を意味する。

「ヴェーダーンタ」(*Vedānta*)の語は、「ヴェーダ聖典の最終部 (*anta*)」を意味する。それはヴェーダ聖典全体の最後に位置するウパニシャッド聖典のことである。このことは、ウパニシャッド聖典がヴェーダ聖典の終結部に置かれているとともに、ウパニシャッドの教説がヴェーダ聖典全体の中で、究極的な教えであることも含意している。ヴェーダーンタ学派はウパニシャッド聖典の意義を解釈学的に考察しようとしてきたが、この学派に属する哲学者たちが究極的に目指したのは、存在の本質の探究ばかりでなく、その本質の探究を超えて、解脱を達成することであった。このようにインドの精神風土では、宗教と哲学は密接不可分に結びついてきた。

シャンカラ派の宗教伝統（スマールタ派とも呼ばれる）において、シャンカラの不二元論ヴェーダーンタ哲学の担い手は、世俗を捨離した出家遊行者（サンニヤーシ）であった。彼らはウパニシャッド聖典に絶対的權威を認めて、ウパニシャッドの教説を継承するなかで、ウパニシャッド聖典の解釈学として、自らの形而上的体験に根ざした哲学的思惟を展開していった。厳しい修行をとおして、最高実在ブラフマンのみが実在で、存在世界は迷妄（マヤー *māyā*）であり、ブラフマンと個的存在の本質アートマンは一体であるという絶対的知識を「体験知」として獲得しようとした。ヴェーダーンタ学派内では、ウパニシャッド聖典が説く最高原理ブラフマンと個的存在の本質アートマンの関わりをどのように捉えるのかによって、さまざまな分派が生じた。彼らはウパニシャッド聖典に依りながらも、自らの形而上的体験を始点として、独自の哲学的思惟を展開していった。彼らはウパニシャッド聖典を典拠としながら、聖典の言葉に込められた意味を自らの体験にもとづいて言説していったのだ。

## 天啓聖典としてのヴェーダ聖典

ヴェーダーンタ学派の根本聖典は、5世紀初めごろに成立した『ブラフマ・スートラ』(*Brahmasūtra*)であった。この名称は聖典の冒頭 (I.1) において、「ブラフマンの考察」(*brahma-jijñāsā*) が宣言されていることに起因している。シャンカラには多数の著作が帰せられるが、彼の主著は『ブラフマ・スートラ』に対する注解書、すなわち『ブラフマ・スートラ注解』(*Brahmasūtrabhāṣya*) である。シャンカラによれば、「スートラ」[「経糸」の意味]は、花のようなウパニシャッドの聖句を結びつけることを目的とする

と記している。<sup>(1)</sup> ヴェーダーンタ学派はウパニシャッド聖典について、その真の趣意を明らかにするために特殊な解釈学を展開した。このことはミーマーンサー学派 (*Mīmāṃsaka*) がヴェーダ聖典の規定する祭祀をめぐって展開した解釈学的研究に対応している。

ヴェーダ聖典は、一般的に祭事部 (*karma-kāṇḍa*) と知識部 (*jñāna-kāṇḍa*) に大別される。前者はバラモン教の祭祀を説く部分であり、おもにヴェーダ聖典の本集およびブラーフマナ文献一般がこの部分に相当する。後者は宇宙万有に関する形而上学的考察を説く部分であり、おもにウパニシャッド聖典がこれに相当する。ヴェーダーンタ学派がヴェーダ聖典の知識部に関する解釈学的研究をおこなったのに対して、ミーマーンサー学派はヴェーダ聖典の祭事部をめぐって研究をおこない、祭祀の意義を考察した。両学派はともに正統バラモン教に特有の哲学であり、ヴェーダ聖典を天啓聖典 (*śruti*) とみなし、全ての知識の絶対的根拠と仰いだ。中村元博士も論じているように、「聖典の中に存する種々なる矛盾不整合を、或る一定の立場から統一調和しようとする態度は、両派にともに共通である。<sup>(2)</sup>」こうした意味で、ミーマーンサー学派とヴェーダーンタ学派は姉妹関係にあった。

## 「人間の目的」—ミーマーンサー学派とヴェーダーンタ学派の違い

インド哲学の伝統において、「人間の目的」(*puruṣārtha*) という言葉は、人間にとって最も望ましいもの、人間の行動の究極的目標を示唆している。ミーマーンサー学派では、「祭祀の実行」が「人間の目的」であり、ヴェーダーンタ学派では「解脱」が「人間の目的」とであるとされる。この実践的目標の違いは、両学派の哲学の違いを端的に示している。ミーマーンサー学派によれば、ヴェーダ聖典に規定される神聖な祭祀を実行し、現世および来世における繁栄を得て、良い果報を享受することが人間にとって最も重要なことである。したがって、人は生涯、祭祀を実行しなければならない。一方、ヴェーダーンタ学派によれば、「人間の目的」である解脱は最高原理ブラフマンの知識 (*jñāna*) から生起する。シャンカラの立場から見れば、祭祀の実行というようなカルマンは「心の浄化」(*sattva-śuddhi*) という意義をもつ。カルマンはブラフマンの「明知」(*vidyā*) が生起するための手段となるからだ。<sup>(3)</sup>

シャンカラ派では、祭祀を実行する生活とブラフマンの知識に専心する生活は明確に区別されて、一人の人物が両方の生活を兼ねることは不可能であると言われる。ウパニシャッド聖典によれば、ブラフマンの「明知」は祭祀的行為から独立したものである。こうした内容のウパニシャッド聖典にもとづいて、シャンカラは哲学文献の中で、専ら「出家遊行」の生き方を強調した。ブラフマンの明知を獲得して、解脱に到達するための最良の方途が「出家遊行」であった。<sup>(4)</sup> シャンカラ派の宗教伝統では、開祖シャンカラの哲学にもとづいて、家庭や財産を捨離することで世俗社会の制約を遁れ、ブラフマンを瞑想して生活することこそが、伝統的に本来的な生き方であるとみなされてきた。

## 【註】

- (1) Śaṅkara, *Brahmasūtrabhāṣya* (Delhi: Motilal Banarsidass, 1980), I.1.2, p. 50.
- (2) 中村元『ブラフマ・スートラの哲学』岩波書店、1951年、59～60頁。
- (3) Śaṅkara, *Bhagavadgītābhāṣya* (Delhi: Motilal Banarsidass, 1978), III.4, p. 108.
- (4) シャンカラ派における「出家遊行」については、拙著『シャンカラ派の思想と信仰』（慶應義塾大学出版会、2016年）、218～304頁参照。